

## 富山いづみ高校

# 「渋谷でもらった 不思議な木の实の話」

2018. 12. 24 上演3

幕が上がると両サイドに長方形の木の板、真ん中には二段の階段があり、シンプルで広い空間が目の前に広がった。この劇は渋谷に来た二人の女の子とパー子似の占い師ジュテームマギーフランソワの出会いから始まった。ルナはその不思議な占い師の指示に従い、駅のトイレに、その占い師から貰った竹の实を流した。すると、戦争が起きている昭和20年5月24日の狭い防空壕にタイムスリップしてしまった。そこでタケという女の子に出会う。物理的に距離が近いこともあり、すぐに仲良くなっていく二人。そこでのルナの成長と、時代が違うだけで幸せが違う残酷さが鮮明に描かれている劇であった。

舞台がシンプルだったため演者の声量や動きの基礎がしっかりしていた。場面転換するときには後ろの幕を使っており、そこがどこなのかが分かりやすくなっていた。最初の渋谷のシーンでは幕がなく広々としていたが、トイレのシーンになると幕が閉まり狭い空間になり、そこに水色の照明をあてることでトイレの水の感じが伝わった。さらに防空壕の時には幕を少し開けて隙間から赤のホリがみえていることで外の残酷さ、怖さが表現されていた。そして、音響では爆破音だけであとは静まった空間が表現されていた。音量も大きく、ビクッと自然に体が動いてしまうのも非常にリアルであった。

防空壕にタイムスリップし、ルナとタケと一緒にチョコレートを食べているシーンでは、幸せの違いがよりわかりやすくなっていた。台本にはあったタケの「涙がでそう」というセリフが本番ではなくなっており、それがもったいなく感じたが、そのセリフがないことでタケがかわいそうに見えるのを防ぎ、時代や環境の違いで二人が楽しく会話できる幸せにスポットを当てたのだと感じた。現実に戻ったルナが戦争のことを調べ学んでいる様子からはタケを助けようとする優しさが伝わった。最後のシーンではお互いがお互いを助けようとする友情がみえ、タケが外に出て爆撃を受けるシーンは大きな音とともにタケがシルエットになり消えていく様子を見て、二人が助かる方法が本当はないのかと思切なくなった。そういった経験をしてルナの「タケちゃんにもらった命」というセリフでルナだけではなく、私たちも戦争で亡くなった命のおかげで今があるということを感じた。しかし、そこからまたタイムスリップできなくなったことは都合がいい設定なのではないかという意見もあった。

戦争を体験した人達が少なくなっている現状で、私たちも実際に戦争を経験したわけではないから、戦争を軽く受け止めているところがある。しかし、ルナのように戦争のことを学ぶことで、戦争があって今の私たちがあるということがわかる。今の便利な世界が当たり前ではないこと、特別で幸せなことなのだと感じさせてくれる作品だった。

上演お疲れ様でした。